

平成29年度 西新井小学校 校内研究計画

平成29年4月28日（金）
足立区立西新井小学校 研究部

1 平成29年度研究主題

主体的・対話的で深い学びの実現 ～ICTの良さを生かした指導の工夫～

2 研究主題について

（1）平成28年度の研究・実践について

本校の研究は、昨年度まで「授業におけるICT活用」「防災巻を活用した防災教育」「第五中学校との小中連携」の3つのテーマを、ほぼ同時並行的に進めてきた。

「授業におけるICT活用」については、平成24年度から取り組んできた「指導におけるICT活用」の土台に立ち、昨年9月からは東京都公立小学校ICT環境整備支援事業の指定を受け、児童がタブレット端末を活用することで、学びを活発に、更に深める方策の研究にシフトしつつある。

「防災巻を活用した防災教育」は、昨年度から本格的に全校全学級での取り組みが始まった。小学校全学年での防災巻授業は先例がなく初の試みであったが、各学年で児童の発達段階を踏まえた上で、命を守るために身に付けさせたい力を考え、多様な授業を実践することができた。また、昨年12月には防災教育研究会を開催。地域・保護者と共に、児童の命を守ることにについて考えることができた。

「第五中学校との小中連携」は、小中学校全教員が参加する研究授業・協議会の型に移行してから2年目となった。「帯時間」「ノート指導」「ICT・視聴覚」「言語活動」の4本柱の上に立ち、小中学校の教員が協力して指導方法を研究した。「帯時間」「言語活動」においては、小中学校それぞれで新たな指導方法が試され、研究が深まりつつある。

（2）平成29年度研究推進計画に向けた課題

平成29年度の研究計画立案に当たって、校内からいくつかの課題点が挙げられた。

○目指す児童像の明確化（小中連携各分科会では議論がなされているが、本校全体としてはどうか？）

○小中連携研究の4本柱にこだわり過ぎではないか

（手段であるはずの4本柱が、「やらなければならない」という目的化してはいないか？）

○指導案立案・検討の計画的な実行（授業者や分科会の意識の問題にもよるが）

以上の項目から現在の課題として見えてくるものは、

「研究や日々の指導を通して、どのような児童を育てていきたいか（特に学習面において）」である。

また、昨今の教育を取り巻く状況は「戦後最大規模」ともいわれる変化の渦の中に入りつつある。

○2020年完全移行の新学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」が求められる。

○小学校5・6年における教科「英語」、3・4年で「外国語活動」

○「プログラミング教育」の必修化（算数・理科・総合的な学習の時間等）

○「特別の教科 道徳」が平成30年度から実施

○2020年五輪を見据えた、オリンピック・パラリンピック教育の推進

（3）今後の研究の方向性

これからは、今まで以上に教師一人一人の力量が問われる時代となり、上記のような変化に対応していくためにも、研究で新たな試みに挑戦していく必要がある。児童の基礎学力の向上を図りつつ、「自分の考えをもち、その考えを交流し、学びを深める児童」を育てていくために、研究を通して指導のあり方を探っていきたい。

また、「教師の多忙化」が社会全体でもクローズアップされつつある現在、職務における多量な課題をいかにスリムにしていくか、また様々な「○○教育」が求められる中、カリキュラム・マネジメントの観点からも、日々の指導を効率的・効果的にしていく必要がある。「時間と労力の重荷が少なく、より効果的な実践」を目指すことも忘れてはいけない。

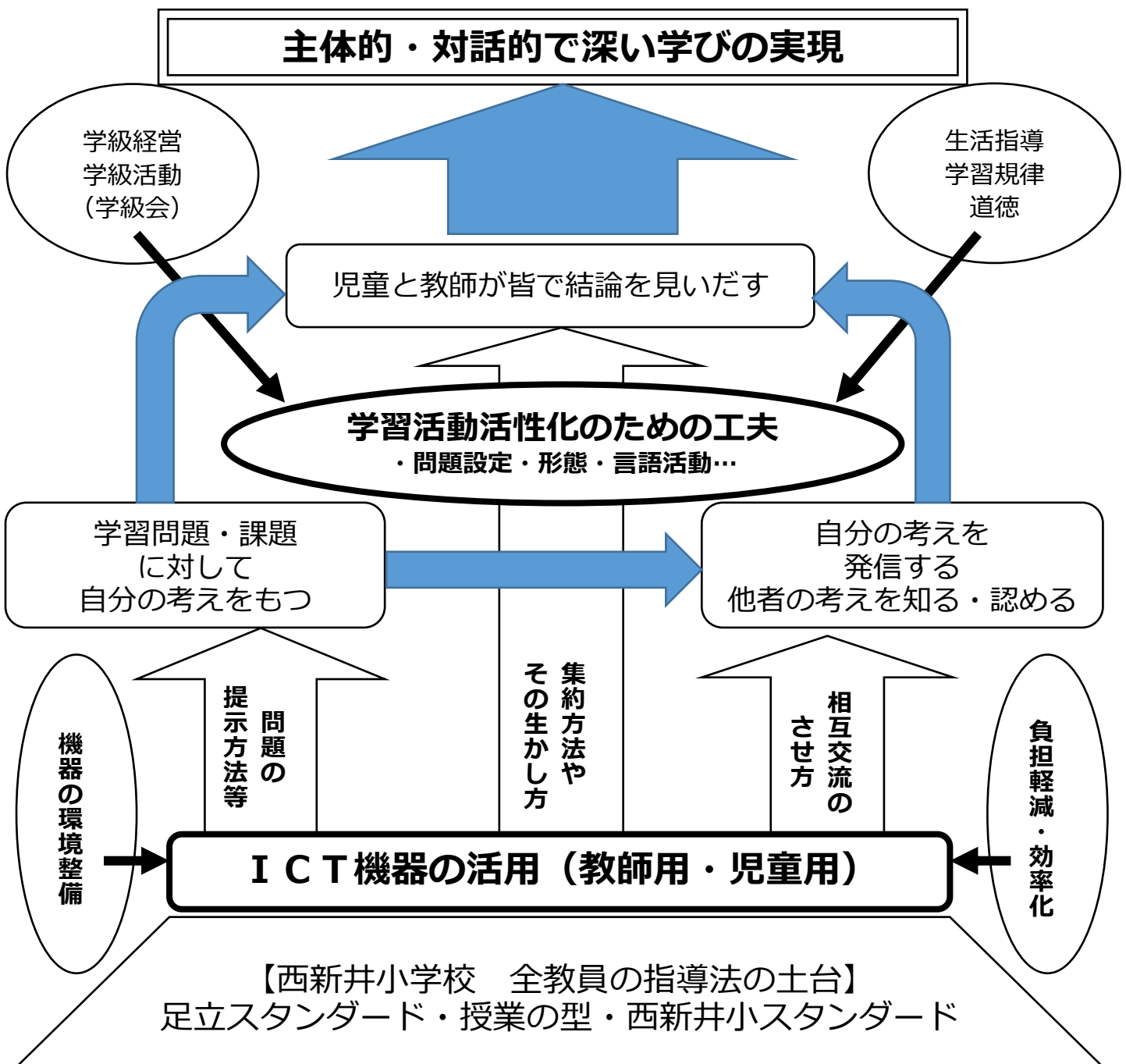
3 平成29年度研究計画の総論

今年度は、「授業におけるICT機器の活用」と「児童が主体となって学びを深める授業」を研究の柱とした。この2つは互いに独立したものではなく、後者を実現させるために前者を効率的・効果的に活用するという考えである。

足立区においては、本校をはじめ全小学校において「足立スタンダード」が指導の基本型として示されている。この型を土台として、上記の柱を実現するための方策を今年度の研究を通して開発していきたい。ICT活用において、本校は区内各校に実践方法や事例を提供していく立場である。研究を通して「負担が少なく、日常の授業に生かせる活用法」を積み重ねていきたい。

また、「児童が主体となって学びを深める授業」はICTの活用の有無に関わらず、これから追求していかななくてはならないテーマとなるだろう。全教科・領域を通して、実現させるための方策を考えていく。

○平成29年度研究構想図



4 各論1「授業におけるICT機器の活用」について

今年度研究の最も大きな柱として、「ICT機器の活用」を設定する。その理由や、機器の活用によって目指すものについては、先述してあるので割愛する。

平成29年度は7月までが東京都ICT環境整備支援事業の指定期間である。それまでは、現在と同様に教員機、児童機ともに十分なタブレット端末があり、無線LANシステムの環境も整っていることから、児童にタブレット端末を活用させた授業の研究を継続し、実践例を蓄積していく。8月以降の機器環境については、現時点で不透明であるが、現時点においては引き続き児童用タブレット端末と無線LANシステムが整備されていると仮定して、研究計画を立案している。

(1) 研究の視点

主体的・対話的で深い学びの実現

『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）【概要】』（H28.12.21中央教育審議会）より一部抜粋

2. 「主体的・対話的で深い学び」を実現することの意義（「主体的・対話的で深い学び」とは何か）

- ① 学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

◎平成29年度の本校の研究においては、以上の定義を踏まえ、各学年発達段階における「**主体的・対話的で深い学び**」の具体像を見出し、各研究授業において、それらがどの程度実現できたかを検証する。

◎「主体的・対話的で深い学び」を実現させる手段の1つとして、**ICT機器（教師用・児童用）を活用する。**

◎授業研究に当たっては、「帯時間」「言語活動」「ノート指導」の手立ての工夫も考慮する。

※全てを網羅するのではなく、発達段階や学習内容を踏まえ、適宜取り入れるものとする。

(2) 研究の方法

○年間6回の研究授業を実施

（実施日案：5月31日、7月5日、9月20日、10月18日、11月22日、12月13日）

○9月、12月は、校内研究と小中連携研究を兼ねる。

○2分科会を設定する。（教員ICT活用分科会、児童ICT活用分科会）

○都ICT事業期間である6月、7月は「児童ICT活用分科会」の提案授業とする。

○国語、算数、理科、社会、体育、専科のそれぞれから授業提案がなされるように調整を図る。

○授業後は研究協議会を行い、上記の視点から成果と課題をまとめる。

○授業の最後には必ず児童に「振り返り・自己評価」を書かせ、効果検証の材料とする。

(3) 研究組織図



小中連携授業研究組織における各教科・領域分科会の割り振りについては、校内研究組織の「教員 I C T 活用分科会」「児童 I C T 活用分科会」が決定した後に、それぞれの分科会で話し合い、各教科分科会に教員が概ね均等に分かれるように調整していく。

※ 分科会決定の流れ

- ①教員アンケートの実施（専門教科、I C T 分科会所属希望）→②調整後、I C T 分科会決定
→③各 I C T 分科会で話し合い、小中連携分科会に教員を分ける→④小中連携分科会決定

(4) 平成29年度 分科会メンバー・研究授業実践者

(5) 研究授業実践までの流れ ※スケジュールを意識し、計画的な授業提案をお願いします！

授業日1か月前	授業単元、授業内容決定	○教科・領域メンバーで相談する。
授業日2週間前	授業指導案1次案 検討 指導案送付（北澤先生）	○教科・領域メンバーで検討する。 ※小中連携を兼ねる場合、第五中と日程調整の上、行う。
授業日1週間前	授業指導案2次案 検討 ICT支援員との調整	○教員ICT／児童ICTメンバーで検討する。 ○授業当日の支援員との役割分担を決めておく。
授業日3日前	※模擬授業	○必要に応じてメンバーを集めて実施する。
授業日	研究授業・研究協議会	○分科会提案は教科・領域メンバーが行う。 ○学習内容に関する質問や意見には教科・領域メンバーが ICT活用に関する質問や意見には教員ICT／児童ICT メンバーが答える。
授業後2週間内	研究授業のまとめ	○「成果と課題」を指導案の最終頁にまとめる。（A4・1頁）
年度末までに	研究収録作成・日常へのフィードバック	

※研究授業者は、それぞれの教科・領域、ICT活用分科会メンバーを代表して授業を行います。
 授業の立案・提案の責任は、分科会メンバーの全員にあります。
 授業者個人に立案を任せるのではなく、メンバー全員が自分事として授業提案に参加しましょう。

6 各論2「防災巻を活用した防災教育」について

昨年度の実践における成果と課題を基に、今年度は年2回の防災巻授業を実施する。それぞれの学年で児童の発達段階や身に付けさせたい力（防災上の観点から）を踏まえ、昨年度の実践をベースに取り組むようにする。昨年度から、2点の変更を行う。

①学校・家庭 防災教育の実施

学校の取り組みを理解してもらうと共に、各家庭においても児童の命を守るために防災意識の向上を図る。

②各学年1学級を公開し、互いに授業を見合い、成果と課題をまとめる

本校で毎年継続して実施していくために、経験を実践に残していく。

（1）防災巻校内研修会の実施（4月～5月ごろを目途に）

- 防災巻授業の基本的な流れの確認
- 昨年度の各学年で行った授業の実践報告
- 防災巻シートを使った演習（教員が実際に防災巻に書いてみることで、本校の避難計画を検証する）

（2）第1回防災巻授業の指導案立案（6月中を目途に）

- 昨年度の実践を生かして、今年度の防災巻授業の指導案を作成する。（略案）
- それぞれの学年で指導案ができれば、学力向上委員会で報告し、助言を得る。
- 必要に応じて学年間で指導内容の調整を図る。

（3）第1回防災巻授業の実践（7月中）

- 各学年で指導案に基づいて授業を実施する。
- 各学年1学級は、他の教員に授業を公開する。
- 他の教員はその授業をできるだけ見合い、感想をシートに記入し、研究部へ渡す。
- 研究部は、感想シートを集約して実施学年に報告する。

（4）防災巻授業の内容を踏まえ、各学年で家庭への宿題を出す（夏休み）

- 第1回授業で出来上がった作品と共に、各学年でワークシートを作成し、家庭へ宿題を出す。
- 内容例 ・地震が起きたときの集合場所 ・避難に使う道 ・必要な持ち物 ・今から家でできること
- 出来上がった防災巻に対する、家庭からの感想を集めたい。

（5）第2回防災巻授業の指導案立案（11月までを目途に）

- 第1回授業の成果と課題を踏まえ、2回目の授業の指導案を作成する。（略案）
- 前回と「災害の種類」「想定時刻」「想定場所」などを変えて取り組めるようにする。
- それぞれの学年で指導案ができれば、学力向上委員会で報告し、助言を得る。

（6）第2回防災巻授業の実践（12月中）

- 具体的な方法については、第1回授業に準じる。

（7）防災巻授業の内容を踏まえ、各学年で家庭への宿題を出す（冬休み）

- 第2回目の授業の作品と共に、夏休みのワークシートを再配布し、家庭で見直しをさせる。
- 第2回目の防災巻に対する、家庭からの感想を集めたい。

（8）研究のまとめ（3月）

- 他の研究と合わせて、今年度の取り組みのまとめをする。

防災巻授業の実施にあたっては、「3. 11を忘れない」「地震と安全」「東京防災ノート」など、都教育委員会で配布している防災教育副読本を積極的に活用する。

7 各論3「外国語活動推進」について

昨年度の足立区における先行実施の成果と課題を基に、今年度は低学年部年間10時間、中学年部20時間の外国語活動を実施する。また、高学年部は、2020年の教科化を見据えた学習が展開できるよう、新教材の開発にも力を入れていくとともに、中学校への接続も視野に入れた授業の展開を研究していく。

【校内での取り組み】

（1）外国語活動校内研修会の実施（年間10時間実施：第1回4月中）

- 中学年外国語活動の授業の基本的な流れの確認
- 最終活動の組み立て方
- 絵本を活用した授業実践の報告

（2）教員の英語力向上 Today's one point phrase の活用

職員室横のミニ黒板に、日常会話でよく用いられる key phrase を日替わりで書き込み、教員の英語力向上に努める。品詞ごとに色分けして書くことで、文構造への意識付けもしていけるよう工夫していく。足立区では、児童が英語を使っていこうという雰囲気をつくるため、授業の最初に free talk の時間を設けるよう推奨している。その free talk でよく使われるようなトピックのフレーズを掲示することで、教師が授業の場面で話す内容のヒントにしてもらうとともに、教師自身の英語力向上にもつなげたい。

(How are you doing?・・・あいさつで使われる表現)

I'm good at ~. How about you?・・・特技についての会話で使われる表現)

（3）英語朝会の実施

毎月1回程度、全校朝会の時間に児童に向けて英語のスピーチを行う。1分以内程度で、時事ネタや流行ものについてのトピックで行う。児童が少しでもヒントが探せるよう、simple, short, smile を心がけ、スピーチをする。

（4）Classroom English の促進

Classroom English の一覧表を作成し、各クラスに配布する。最低限の指示英語と、ほめ言葉を提示し、積極的に教師が英語を使うことで、児童の推測力の向上に努めていきたい。ほめ言葉は、毎時間違う言葉を用いることによって、教師と児童双方の英語力向上への取組とする。

（5）共通のめあての掲示物の活用

Listen Carefully, Clear Voice, Eye contact, Gesture の4観点について共通の語句カードを提示することで、全学級でのコミュニケーションの基礎の共通理解につながる。内容や習熟度によっては、Response や Reaction も観点として取り入れ、より実際に近いコミュニケーションが取れるようにしたい。

高学年の外国語活動の実施にあたっては、

“Hi Friends” “Hi Friends Plus” “Welcome to Tokyo” を活用し、

中学年の外国語活動の実施にあたっては、

“Brown Bear, Brown Bear” などの絵本教材を活用していく。